
前 言

西本豊弘

研究の目的

縄文文化では縄文土器が多量に作られたことが特徴である。また、同じ文様の土器が一定時間、ある特定地域で継続して使われた。そのような現象を捉えて土器型式と呼ぶが、ひとつの土器型式は短いもので30年程度、長いもので200年程度使用されていたことがAMS年代測定で分かってきた。そして、その土器型式から次の土器型式に変化するが、土器型式がなぜ一定の時間維持されるのか、また、それがなぜ変化するのかについてはあまり感心を持たれていない。また、土器は誰が作ったのであろうか。縄文人の家族単位か、集落内に土器作りをする特定の人々が居たのか、土器が集落外にまで流通したのか、同様の文様の土器が分布する地域は何を意味するのだろうか。これらの問題は、縄文土器研究の基礎的な疑問であるが、研究はあまり進んでいない状況である。

そこで本研究では、少しでもこれらの問題の解決に近づくことを目指して、北関東地方の縄文中期の土器の生産と流通を中心として共同研究を進めることとした。特に、勝坂式土器と阿玉台式土器が接触した地域で生まれた両者の折衷的な土器である「焼町土器」に焦点を当てることとした。そして、土器の流通を考える前提として、まず土器生産の実態を捉らえることを目的とした。

方法

その方法は、考古学的型式論から見た土器型式の認定と自然科学的方法としての胎土分析という二つの方法を併用して、それぞれの結果を合わせて検討することであった。そこで、土器型式の研究者として小林謙一・山口逸弘・寺内隆夫・塚本師也の4名に同じ土器について勝坂式土器・焼町土器・阿玉台式土器であるかどうかの検討を行っていただいた。そして、それらの土器から胎土を採取し、その分析を建石 徹・清水芳裕・水沢教子の3名が実施した。縄文土器の胎土分析は、これまでは土器を破壊するというので、土器型式の不明な破片で行われることが多かった。しかしこの研究では、復元されていて誰が見ても同一土器型式とするであろう資料の胎土分析をさせていただいた。ただし、このような資料以外にも、実際には土器型式の定かでない小さな土器破片も分析する必要が生じた。

結果

土器型式の認定については、勝坂・焼町・阿玉台の3分類での小林氏など4人の研究者の相違は少なかった。しかし、焼町土器の形成と変容のプロセスについては、それぞれの研究者ごとに微妙

に異なっていた。胎土分析においては、混和材を分析している清水・水沢の両氏の間で分類の仕方が異なり、土器グループの分け方が異なっていた。さらに土器胎土の母材である粘土の分析を行った建石氏の研究を加えると、3者3様の土器グループの認定となった。結論として、焼町土器は、勝坂式土器と阿玉台式土器の影響を受けて成立したが、在地の粘土と混和材を用いていることから現地で作られたことと、独自の変容を示すことから、土器型式としても独自性をもつことが明らかとなった。また、勝坂式・阿玉台式ともに、本拠地で作られたものと現地で作られたものがあり、時期によって異なることも確認された。つまり、縄文中期土器は地域性が強く、それほど流通しないという結論となった。これらの詳細については、各研究者の論文にまとめられているので参照されたい。

今後の課題

このように、縄文土器は大きな型式であろうと地域色の強い土器であろうと、いずれもその地域で作られたものが主体であるという結果となった。これが縄文中期の関東・中部地方のみの特有な現象だとしても、この研究の当初に考えた仮説、つまり土器が各家庭で製作されるのではなく、特定の場所で生産され流通しているのではないか、という筆者の仮説を覆す結果と言える。もちろん、その結果からすぐに土器文様の持続性と変化の原因を明らかにすることはできない。新たな方法論による検証が必要であろう。ここでは、この共同研究の成果の一部を公表する次第である。